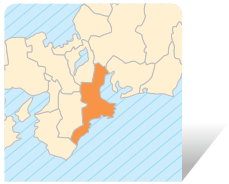
取材日：2017年3月22、27、30日

糖尿病


三重県

20年以上続く療養指導教育プログラムにより県全域の糖尿病診療の質向上に挑戦。

Point of View

① 1997年から継続する「糖尿病療養指導士育成のための講習会」を、延べ6,000名以上のメディカルスタッフが受講

② 2016年度より地域糖尿病療養指導士（CDEL）の認定を開始

③「みえ糖尿病サポートネット」で包括的な糖尿病の情報を発信

独立行政法人地域医療機能推進機構四日市羽津医療センター院長
住田 安弘先生

糖尿病療養指導の向上をめざし20年前から講習会を継続

1990年代後半、患者を中心とした多職種協働による糖尿病チーム医療が欧米で提唱されると、我が国においてもメディカルスタッフによる糖尿病療養指導が注目され、各地でさまざまな取り組みが開始された。

三重県では、1997年から「糖尿病療養指導士育成のための講習会」の開催が始まる。住田先生が当時の経緯を振り返る。

「糖尿病のチーム医療は欧米では1980年ころから注目されるようになり、私も1986年に当時勤務していた三重大学医学部附属病院で、栄養士、看護師とともに糖尿病教室を始めました。当初は試行錯誤の連続でしたが世界的に糖尿病療養指導の研究が進んだのを背景に、次第にチーム医療が形成されていきました。

一方、そのころ糖尿病患者の増加とともに、合併症の進行が問題となり急速に医療ニーズが増加しましたが、三重県の糖尿病専門医は現在でも45名と少なく、医師だけで対応するのは不可能でした。そこで、病院の枠を越え県内全域で専門性の高いメディカルスタッフを育成し、チーム医療を実践することが不可欠と考えるようになりました。そんな中、九州を中心にエリア限定の地域糖尿病療養指導士（CDEL）の資格を認定する活動が始まり、その取り組みにならって、我々も講習会を開始するに至ったのです」（住田先生）

住田先生

第１回講習会は474名もの参加があり、医師、看護師、栄養士、薬剤師、臨床検査技師など幅広い職種が集結した。糖尿病療養指導に対するメディカルスタッフの関心は一気に高まり、1998年以降は年２回に回数を増やし、現在までの20年間で38回を開

催、延べ6,000名以上が専門的な糖尿病療養指導を学んでいる（【資料１】）。

講習会は休日に開催され、医師だけでなくメディカルスタッフ各職種が講師となり、朝から夕方まで７時間にわたりレクチャーが行われる。

「第１回の講習会で474名もの方が学ぶ姿を目の当たりにし、メディカルスタッフの関心の高さと熱い思いに驚きました。当時、糖尿病以外にもさまざまな疾病領域で職種ごとの専門認定がスタートし、注目されていましたので、本講習会が将来の認定につながるのではとの期待感があったのかもしれません。

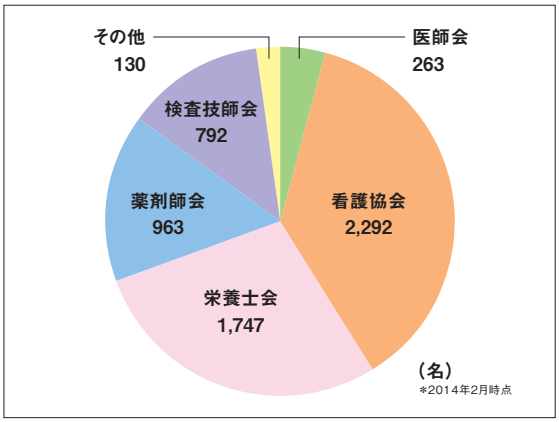
しかし、それ以上に糖尿病の療養指導にかかわりたいという思いが強かったのだと思います。糖尿病は患者自身が努力して生活習慣を変えなければ、病状が改善しない疾患です。スタッフの皆さんが、糖尿病の療養指導を学び、患者さんの行動変容を支援することにより、血糖コントロールが改善した経験を持てば、『患者の治療に直接かかわっている』と強く実感できます。その手応えを求めて、たくさんの人数が集まったのでしょう。

講習会も回を重ねるとスタッフの知識の向上がもたらされ、診療の質がレベルアップしたと多くの先生から意見が寄せられます。特にフットケアの普及により、糖尿病の重症患者の下肢切断を経験することも減りました。医師の負担も明らかに軽減されています」（住田先生）

2017年に三重県独自のCDEL認定を開始

県内で糖尿病療養指導士育成のための講習会を開始した４年後、2001年に日本糖尿病療養指導士（CDEJ）の認定が始まった。三重県でも多くのメディカルスタッフがCDEJに挑戦し、現在267名が認定を受けて活動している。しかし、CDEJは糖尿病の専門医療を提供する医療施設の勤務者に対象が限定されるため、県内全域の糖尿病診療を底上げするには、医療機関や行政機関、保険薬局などでも療養指導の担い手を育成する必要があった。

【資料1】「糖尿病療養指導士育成のための講習会」参加者合計と内訳



そこで日本糖尿病協会三重県支部は、2016年度よりCDEL認定を開始し、2017年２月の第１回認定試験では16名が合格。CDEJを対象としたCDEL追加認定に応募した希望者35名と合わせると、合計51名のCDEL認定者が誕生したことになる。

「CDEJは受験や更新のハードルが高く、難しいとの声がありましたが、CDELはより多くの方に挑戦してもらえるプログラムなので、糖尿病療養指導の裾野の拡大と専門性の深化につながると思います。CDEL認定の取得は当人が糖尿病療養指導のスタート地点に立つことであり、決してゴールではありません。患者さんのため、三重県全体の糖尿病診療向上のために、広い視野を持った活動を期待しています。また、CDEJには高度な知識と経験を生かし、さらなるリーダーシップの発揮を望みます。CDEJが先頭に立ってCDELとともに学び、ともに活動しながら、新たなCDEL挑戦者が広がっていく――。そんな好循環ができれば、県内全域での糖尿病診療の向上につながるはずです」（住田先生）

最後に、三重県の糖尿病診療における今後の課題と取り組みについて住田先生に伺った。

「糖尿病患者の高齢化にどう備えるかが重要な課題です。日本糖尿病協会三重県支部では介護事業者を対象とした糖尿病の啓発活動に着手し、本年６月には日本介護支援専門員協会との共催で勉強会を開催しました。現状では、認知症を持ったインスリン投与患者の介護施設入所後のケアなど、医療と介護が連携して解決しなければならない課題が山積していますので、両者の連携は今後ますます重要になるでしょう。

今後の取り組みに関しては、三重県ではCDELの認定を開始しましたが、認定を受ける、受けないにかかわらず、医療や介護、行政などで活躍する多くの方に講習会に参加いただき、糖尿病療養指導の知識と活動の輪を広げていきたいと思います」（住田先生）

独立行政法人地域医療機能推進機構
四日市羽津医療センター
〒510-0016
三重県四日市市羽津山町10-8
TEL：059-331-2000

三重大学医学部附属病院糖尿病・内分泌内科
病院教授
矢野 裕先生

三重大学医学部附属病院糖尿病・内分泌内科
外来副主任
古田 範子先生

医師不足地域での糖尿病重症化予防の鍵を握る糖尿病療養指導士の活動

近年、三重県では、へき地等の医師不足地域での糖尿病重症化予防が重要な課題となり、地域に根ざした糖尿病療養指導士の育成が不可欠だと矢野先生、古田先生は言う。

「医師不足地域では、特に重症の合併症を有し治療に難渋する糖尿病患者への対応に限界があり、発症早期からの介入により血糖の悪化を防ぎ、合併症の進展を抑制し、重症化しないような治療を行える体制が必要です。そこで、鍵を握るのが糖尿病療養指導士であり、その育成が急務です。専門医の支援によって、地域のメディカルスタッフが糖尿病療養指導士として育成され、糖尿病の予防と治療に対して積極的に介入することで、糖尿病患者の重症化を防ぐことが可能となります。

さらに、県内全域で糖尿病療養指導士が活躍することにより、各地域での糖尿病診療が充実し、治療に難渋する糖尿病患者を減らせる可能性があります」（矢野先生）

「私はへき地医療現場での勤務経験がありますが、専門医のいない病院では、多様な疾病への対応が必要であり、どうしても緊急性のある疾患を優先せざるをえません。一方、糖尿病の合併症予防には、患者さんやご家族とじっくり向き合い、行動変容を促すことが重要です。医師不足地域の医師は合併症予防の重大性を認識しつつも、それだけの時間と労力を割くのが困難な状況に置かれていますので、糖尿病療養指導士を交えたチームでの患者支援が欠かせません」（古田先生）

矢野先生

正しい情報発信と市民啓発のため総合情報発信サイトを開設

医師不足地域のみならずポイントになるのが、正しい糖尿病の情報発信と啓発の充実だろう。三重大学では2014年から、三重県の助成事業を活用し、糖尿病のインターネット総合情報発信サイトである「みえ糖尿病サポートねっと」を開設（【資料2】）。2016年３月には、県民公開講座を開催した。

「みえ糖尿病サポートねっとには、糖尿病に関する県内のさまざまな情報が集約されています。

たとえば糖尿病療養指導士向けには研修会やCDEL認定の案内を、患者向けには病院や診療所で行っているイベントや公開講座の情報など、当サイトにアクセスすれば、多くの情報につながっていけるように工夫しました」（古田先生）

さらに、三重大学は糖尿病対策で行政と密な連携体制を構築。古田先生が県の行政職としての勤務を経験し、医療だけでなく介護や福祉、教育に関しても連携の可能性を探る。

「２型糖尿病は、たとえ遺伝的な素因がある方でも、食や生活習慣に対する正しい知識を持って、若いころから食生活に注意すれば発症予防をできる可能性があります。

また、行政と連携して、学校教育の中で食育や生活習慣だけでなく、糖尿病に関する正しい知識を発信したり、子育て中のご家族に啓発ができれば、お子さんが将来、糖尿病を発症するリスクを軽減できるかもしれません」（古田先生）

「我々は、糖尿病対策に熱心な栄養士や保健師の方をはじめとする多数の行政職の皆さんと連携しながら活動してきました。

三重大学にとって行政との連携は臨床や研究と並ぶ必須のミッションであり、県や市町と協調しながら糖尿病対策をさらに発展させ、糖尿病患者の発症の予防と重症化の抑制に貢献することが、私たちの重要な役割だと考えています」（矢野先生）

【資料2】
「みえ糖尿病サポートねっと」サイトのイメージ

出典：http://mie-dm.net/

三重大学医学部附属病院
〒514-8507
三重県津市江戸橋2-174
TEL：059-232-1111

糖尿病療養指導士の育成で、へき地の糖尿病診療の底上げを

独立行政法人国立病院機構
三重中央医療センター
統括診療部内科系診療部長
田中 剛史先生

三重県は専門医が少なく、山間部を中心に糖尿病診療体制の過疎地域を有しており、その対策として糖尿病療養指導士の育成を重視してきました。

中でもCDEJに対しては、周囲のメディカルスタッフを指導的立場でリードし、多くの後進を育ててほしいと期待しています。また、新たにCDEL認定が開始されましたので、糖尿病療養指導士の裾野が広がり、へき地の糖尿病診療の底上げにつながるでしょう。

糖尿病性腎症重症化予防プログラムでも、糖尿病療養指導士の役割は重要です。

特に、未受診患者に対する受診勧奨においては、糖尿病の知識を持った保健師の担うところは大きい。しかし、そうした保健師の教育については、市町によって濃淡があるのが現状です。

糖尿病療養指導士の教育プログラムを活用し、すべての市町で、高い専門性を有した行政官を育成していく必要があります。

独立行政法人国立病院機構
三重中央医療センター
〒514-1101
三重県津市久居明神町2158-5
TEL：059-259-1211

約40名のCDEJが専門性を生かし地域での活動を拡大

日本赤十字社伊勢赤十字病院
糖尿病・代謝内科部長
村田 和也先生

当院のCDEJは、増減はあるものの常時40名前後が認定を受けて活動しています。

これは医師が強く要請したから行われているのではなく、制度発足当初に認定を受けたCDEJが後進を育て、歴代のメディカルスタッフが自主的に挑戦を続けてきた結果です。彼らは、自らの専門性を生かすことに非常に熱心であり、活躍の場は院内にとどまりません。

代表的な活動例として、出前形式の勉強会が挙げられます。これは、看護師や管理栄養士、薬剤師、臨床検査技師、理学療法士などの異なる職種で2、3名のチームをつくり、専門医不在の実地医家などの医療機関を訪問するもので、患者向けの糖尿病教室やメディカルスタッフ対象の勉強会などを行っています。

最近では伊勢湾の離島、神島からの要請を受けてスタッフが出向き、出前形式勉強会を実施するなど、へき地糖尿病医療への貢献も模索しています（【資料3】）。今後は、糖尿病療養指導士の強みを生かし、日本慢性疾患重症化予防学会（JMAP）と連携して伊勢市周辺での透析予防確立に取り組む予定です。

【資料3】
伊勢赤十字病院のメディカルスタッフが神島で出前形式勉強会を行った様子

日本赤十字社伊勢赤十字病院
〒516-8512
三重県伊勢市船江1-471-2
TEL：0596-28-2171

（審）17Ⅷ105